



〔写真提供〕

帝京大学医学部リハビリテーション科：栢森良二氏

岩倉博光先生 ご略歴

生年月日 昭和 9 年 5 月 28 日

出 生 地 香川県

現 住 所 東京都杉並区下高井戸 4-9-17

昭和 35 年 3 月 東京大学医学部医学科卒業

昭和 40 年 3 月 東京大学大学院修了，医学博士授与

昭和 43 年 7 月 関東通信病院整形外科副部長

昭和 46 年 7 月 ニューヨーク大学医学部レジデント
コース修了

昭和 47 年 1 月 伊豆通信病院第二リハビリテーション
科部長

昭和 47 年 4 月 帝京大学医学部助教授

昭和 52 年 9 月 帝京大学医学部リハビリテーション
科教授

平成 2 年 1 月 13 日逝去 (55 歳)

ご所属学会，委員会等

日本リハビリテーション医学会理事，
評議員

日本整形外科学会評議員

日本義肢装具学会常任理事

第 14 回運動療法研究会会長

アメリカ合衆国リハビリテーション
アカデミー正会員

日本人間工学会評議員

国際リハビリテーション学会アジア
太平洋地区委員長

厚生省理学療法士・作業療法士試験
委員長

岩倉博光君の突然の死を悼む

大井 淑雄

(自治医科大学整形外科)

岩倉博光君は昭和35年卒の我々同期の1人である。中村隆一、中島寛之、そして小生の4人が学生の時から一緒に勉強した。入局の同期生はこの他に高田 聡、東 璋、水島 裕、大島正弘がいるが、すでに小野真通を失っている。岩倉君が今年病に倒れ、急逝したことを聞き、あまりに突然の出来事で、驚き、かつ悲嘆にくれている。学生の頃から身体はむしろ頑健で活発と見られたし、またほがらかな、例の大きな声で一生懸命頑張っていたのが印象に残る。真面目な努力家で、頭脳もスマートであった上に、粘り強い性格でもあった。

我々は卒業後、故三木威勇治教授の整形外科教室へ入局したが、4人共に希望して大学院生となった。この時、三木先生は定員をわざわざ他の教室から1名借りて、我々を迎えて下さったのである。その後も我々は何かと共通の興味ある学問上の討議を繰り返していたので、これが我々をして、全員薬理学教室の熊谷 洋名誉教授の許へ勉強に行かせることになった。三木先生からは“これからの整形外科は単なる手術が出来るとか出来ないではだめだ。しっかり基礎医学の雰囲気を勉強してきなさい”といわれたが、その結果、熊谷先生から鬼の江橋節郎先生へあずけられたわけである。江橋先生はもちろん温和な方で、鬼とは“学問の鬼”という意味である。我々はここで筋肉の研究の手ほどきを受けた。この頃は一生のうちで最も勉強した時期といえよう。夜遅くまで実験し、論文もよく読んだものである。そして4人は揃って何とか学位をいただくことが出来た。

この頃岩倉君は、数か月間だったと思うが、ちょっと身体をこわしたことがある。しかし、大過なく卒業した。

その後、我々は各自それぞれの道を歩み始め、中村は Orthopaedic neurology、中島は Sports medicine へと向かう。小生は日本にはまだ十分でないというわけで、米国へ Rehabilitation medicine の様子拝見に、岩倉君は通信病院へと分かれて行った。しかし、数年後、岩倉君も渡米し、米国で専門医の資格も取得された後、本邦のリハビリテーション医学そのものに没頭するようになる。昨今の岩倉君が成し遂げられたリハビリテーション医学会における業績は今さら言うまでもないが、理事としての仕事をはじめ、各種委員会の委員長、各研究会会長などあまりにも多忙に過ごされた。健康については、医師だから気をつけないわけではあるまいが、責任感の強い性格から、あらゆる仕事を手を抜くことなく完遂された分だけ、自己を省みる時間が減ったのであろうか。

我々の同期はいろいろ自己主張も強く、議論も嫌いではないが、高田 聡ら開業の者も含めて大変仲が良い。岩倉君の訃報に接してからもう数週間を経たのに、今でも一本の歯の歯が抜けた感じで何となく落ち着かない。今後の岩倉君のますますの活躍が期待されただけに、かえすがえすも残念至極である。ご家族の方々の悲嘆もさることながら、我々一同もがっかりしている。心から御冥福を祈るのみである。

平成2年2月